

研究討論会

「2030 年以降の建設現場の姿」

～現場を補完するロボット技術・AI 技術の可能性と人の役割～

日時：平成29年9月11日(月) 13:00～15:00

場所：九州大学伊都キャンパス

センター2号館2406教室(会場名:VI-11)

担当：建設用ロボット委員会・建設技術研究委員会

【主旨】

i-Construction の先、一層進化したロボット技術や AI 技術の活用によって改善が進む将来の建設現場の姿を思い描き、そこでの人の役割を考える。ロボット技術や AI 技術が将来世代の人間の職を奪うことになると警鐘が鳴らされる今、その利活用の方向性と未来の土木技術者や技能者に求められる資質を考え、これから建設業界が取り組むべき課題を①建設現場におけるロボット技術や AI 技術の効果とリスク②ロボット技術や AI 技術の利活用の方向性③多様な人材の確保や多様な人材の育成等の観点から議論する。

基調講演



穴井 宏和 (あない ひろかず)

株式会社富士通研究所 人工知能研究センター プロジェクトディレクター
九州大学マス・フォア・インダストリー研究所教授
国立情報学研究所 客員教授

1991 年 (株)富士通研究所入社。1999 年 Universität Passau 客員研究員。2003 年より (~2009 年) 科学技術振興機構 CREST 『数値/数式ハイブリッド計算に基づくロバスト最適化プラットフォームの構築』研究代表者。人工知能・数式処理・数理最適化・制御の研究、数理に基づく社会問題解決手法の研究に従事。博士 (情報理工学)。



島本 卓三 (しまもと たくぞう)

国土交通省 九州地方整備局 九州技術事務所長

1958 年愛媛県生まれ、愛媛大学工学部土木工学科卒、1983 年建設省 (現国土交通省) 入省。九州地整の河川工事課長、地域河川調整官で雲仙普賢岳、新燃岳での砂防事業 (無人化施工を含む) を担当。昨年熊本地震では河川情報管理官として「阿蘇大橋地区斜面防災対策工事 (無人化施工) を担当。4 月より九州技術事務所長として簡易遠隔操縦装置 (新ロボ Q) の開発に携わっている。

話題提供者



山根 修治 (やまね しゅうじ)

建設技術研究委員会委員長
株式会社大林組 専務執行役員

1950年兵庫県出身。1975年神戸大学大学院土木工学研究科修了。同年(株)大林組入社。現在同社専務執行役員東京本店土木事業部長。2016年より建設技術研究委員会委員長。



延藤 遵 (のぶとう じゅん)

建設技術研究委員会 運営副小委員長
清水建設株式会社 土木技術本部技術計画部長

1965年広島県生まれ。1989年東京大学大学院工学系研究科修了。同年清水建設株式会社入社。1996年米国ワシントン大学土木工学科留学。2016年より現職。博士(環境学)



北原 成郎 (きたはら しげお)

建設用ロボット委員会災害・事故研究小委員長
株式会社熊谷組 土木事業本部 ICT 推進室長フェロー職

1983年4月熊谷組入社、建設ロボット、無人化施工、情報化施工の開発導入、2016年5月熊本地震による阿蘇大橋地区斜面防災対策工事にて、ネットワーク対応型無人化施工システム実施。2016年10月より土木事業本部 ICT 推進室長。現在に至る。平成28年度土木学会技術賞、第19回国土技術開発賞優秀賞



古屋 弘 (ふるや ひろし)

建設用ロボット委員会新技術研究小委員長
株式会社大林組 技術研究所 上級上席技師

1983年(株)大林組入社、地盤関連の技術支援、現場(地下鉄)を経て、1997年よりGNSS・データベースを用いた施工管理システムの開発、1998年より加速度応答を用いたリアルタイム施工管理技術を開発。前(公社)地盤工学会副会長。技術士(建設部門)、工学博士、ISARC ボードメンバー、熊本大学特任教授

座 長



山元 弘 (やまもと ひろし)

建設用ロボット委員会 副委員長
コマツ CTO 室技監

1958年兵庫生まれ。京都大学卒業後、1982年建設省入省。ダム・道路・河川・下水道、土研・技術事務所経験。機械設備、建設ロボット技術、情報化施工専門。ダム土砂バイパス、橋梁点検、物理探査、舗装調査経験。ISO15143(現場データ交換)、国交省総プロ「ロボット等によるIT施工システム」を担当。技術士(建設・総監)、博士(工学)。2016年9月より現職。